



特 18 号
1833
卷 24

繪本古岡記二篇卷之十二

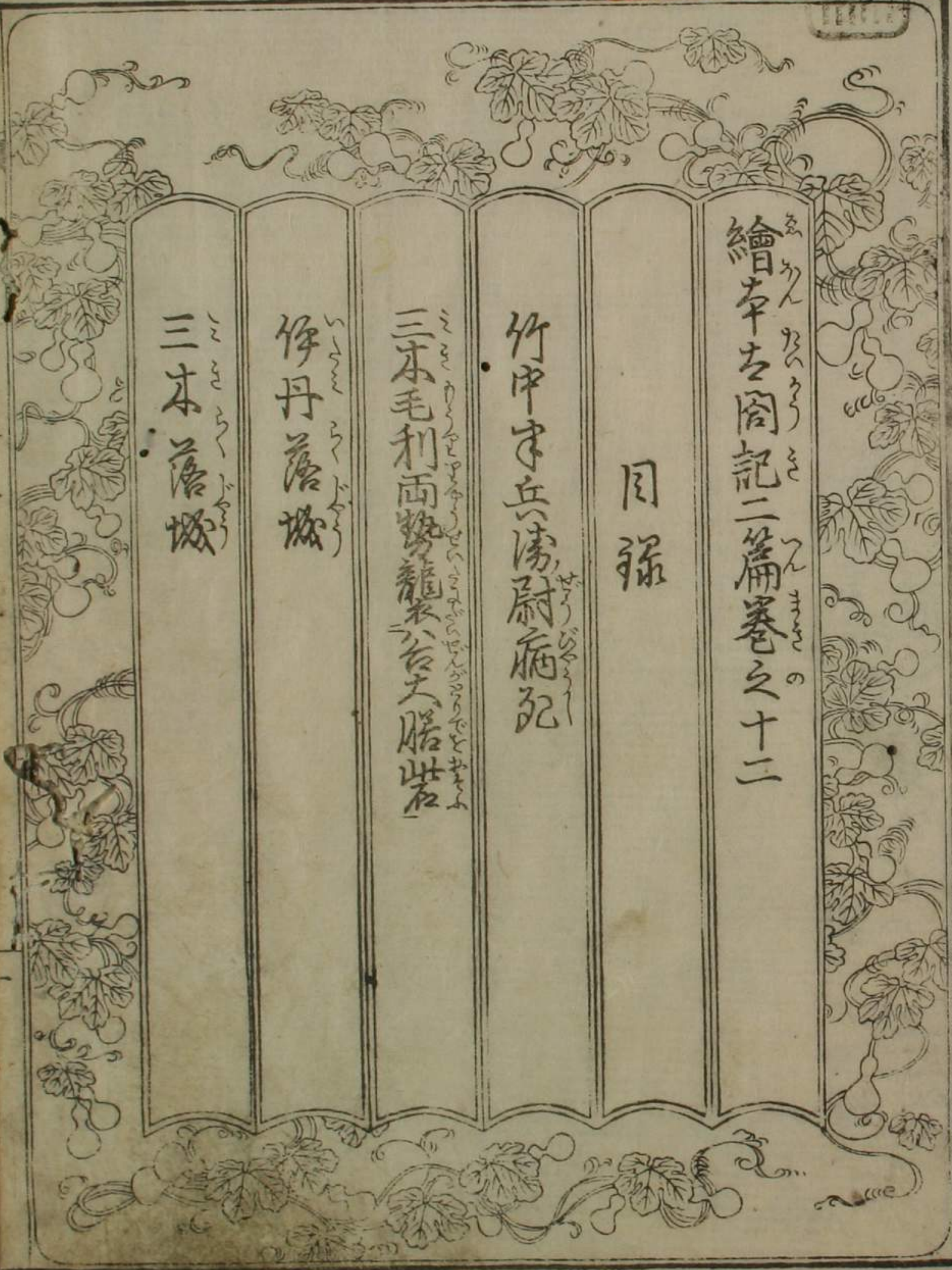
目錄

竹中守兵衛尉病記

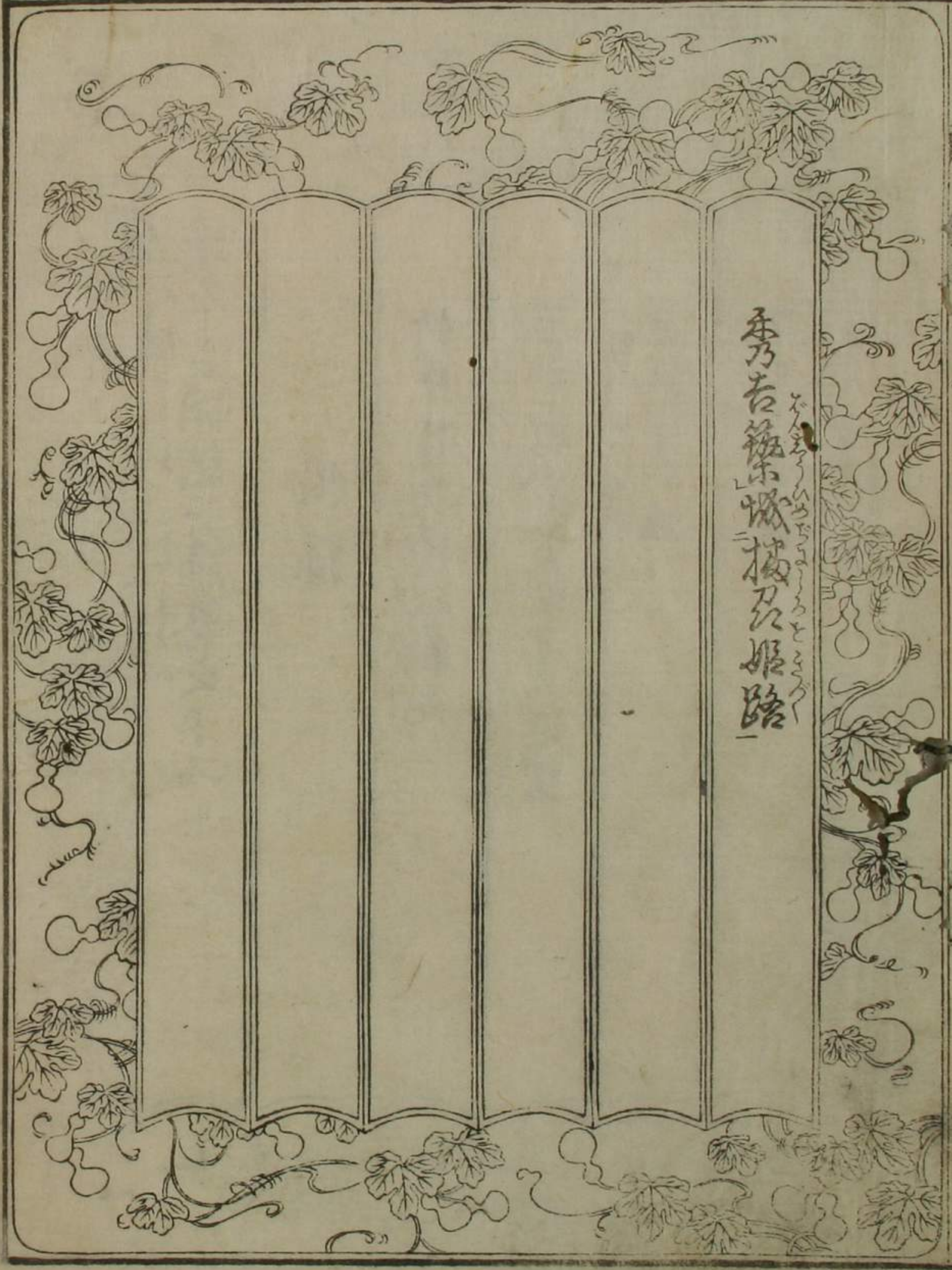
三本毛利西勢龍衣台大膳此

伊丹落城

三本落城



秀吉孫孫城拔刃姫路



繪本古園記二篇卷之十二

竹中守兵衛病死

附み天正七年其又月原田如泉守由家信長の幕下に属せし
小西弥九郎を假若く也(秀吉の陣)是より海り来て由家及中
より河の上の河守具又秀吉に中入の如く細かく御引致されし
九段陣を乞者大家小西により皆人質を出し味方に集りし
諸家一統日ゆ之より人質を具し来りし其の言に奉り安
堵の朱印を中下し河守よりし御出されし言に奉り安
と其某密に思慮をせしはみ河守は八郎殿を人質として
秀吉に御引致りし秀吉少しも疑りて居りて由家を吹奏し
べし八郎殿はみ不肖の由某女孫にありて来りしなり



竹中
半兵衛尉
病死



真景言二卷卷十一

わつたるの出来いとも君達の御身は世に御心とらひ
後よりみづくは且つ小田家内外の風流奇密悉く某より内通
致さばけいともさし間者うらば御家のおらさるいはいはじや
いぞ虫家子逃い後より今幸八歳あつる男八郎と人傑
とあつ小田弥九郎を附く秀吉方へ送りしは秀吉方へ後
被八郎を奪く勞り我子のぶとく傳けが弥九郎より其後
を密に浮田方へ内通し秀吉が寛仁寺度出陣の諸度双ふりの
こしめはじと若れい虫家大さし心を安んじえより毎二の小田方と
なり毛利と敵對の色を放くうら御は此頃羽柴が陣中にあつる
竹中が兵衛を治者氣に犯され病と敗種く敗る藤とて
とくとも又い其強もたなく日毎元氣衰へるば秀吉其心を

痛く軍中の保書は東ちかく教養の人を漏て竹中を系へ登り
葉名敷の運へると齒し樹をくく藤とんも微の効もたぬ
大なる強いは竹中えより死病と覚悟して授者よりいしてや
武門よせま合する者軍陣の内は死せんゆこそなまらぬ我と
横谷平山の陣にけい被ふく死せしむとてまよひて止る
わくが駕よまのせのまこの人殺をて守護せしむ秀吉の陣に
たるそいよんく秀吉を登後竹中の例を去らば有病してあつるが
系治し病の間は耐秀吉を若てやつるいけ度浮田家より降
系治を人傑を捕け毒は承け候一應信長へ伺ひ候いや
知候けて降と脱し強人彼令人傑と送り毒うつるたまと流して
不知をまかせ強人信長への御心を物と辨るは綿よ汁を包じしよ



あきむらたが
 荒木村重
 丹を
 去る



真顯記二篇卷十二

似うりまき若の英名餘りいよく功業日くみ整んたれば信長公
 心程のそを忌殺ひ狹危死て良物執らるの流あり既ニ韓信ら
 女子のおよ殺されり害をなて九か目よ事をを引ひ憲と道とあり
 う信長云英智大才ありともも過明かき流て元風偏之悲
 くい志全く遂がごめんれそよ一そと心よ徳討又徳とく計
 略とめざし強けり者よ小居が心よ的とるりありともも殺て河
 よそと殺せば今痛若頻りて死せんり具又あり人のおよ死ん
 ととる討其まのよはとも構てあつるめと扱ありあひそとい
 終て枕よ着眠ぐおとく死りたる討又天文七年六月廿二日卯
 年又十一歳なり秀吉をを揚て悲々歎と死期の一言肺腑と徹
 一行討の内も忘るるもなく後の形勢を考るに事治が河の府合

せりゆのそかりたる實に暗むき謀士たりしを母屋家を去とのち
 智術謀計をせりて終りたる三國の徐庶に似たり

二本毛利両勢龍谷大膳世石

羽此本統元守秀吉の竹中半兵衛が遠言よ陸ひ渡田和泉守隆
 系若命をまよく五計い中べき有信長云何ひたり信長云河元
 ういにく中園一帯の秀吉に似たる間よりきは着て五計い悉く
 易同よ及ぶはじと信長云れれが秀吉が終て渡田が如智たるをき
 と吉即と名代と信長云に河元見へるに本然安堵の雲付を
 賜たりば渡田一か袖て心と安んじる去後よ橋及丹の籠る荒本
 橋屋也村を築固よ龍嶽く小回家の清和と合戦度くわたりる
 ともとるにき我ひもなく終りてそはなるる山石近中河勢平

友人の言く荒本が方へ使者とて利害と説て降参を勧めけりども
 荒本曾て承列せむも募て敵討ぬむる山中河の支おもせん方
 ちかふを見へうる同年七月三日接津の附城を籠る武友孫平兵衛
 病に死せり信長と暗と表と移ひ遠法お遠く其子助十郎と暢ひ
 するは八月廿日中お信忠御堀休左郎秀政等大軍を降接及み出
 陣り多し信丹の城を差落さんと後せりとも猶るは荒本村を中園
 三本の別本と心と合せ諸方の名をとりてんとは九月二日の夜女房只
 一人を奥に家人助治郎と秘蔵の茶壺をもちて密出し信丹の城と
 比おたが傍の城に入らる此時三本の城の中別本一家の出来り日くみ
 物勢を失ひ今兵糧長くかろうと下心と悩はる中園の毛利照
 元は先も別本が催はる應に兵糧教多送りたりども羽柴本が勢は

往來の乃瓜形切とととさやうわく本園(引く)はるがのまうと云甲
 斐るまきのことと今度も兵糧教多仕之糧米穀く積余せり
 密に三本の城の中使者を遣(魚信)の濱(兵糧)と送り着(と)同九月
 九日夜半の以城中より討て出て敵の陣と切崩し兵糧を丸入るし
 此方より軍勢を差向け同時よは狭んで討破るにこそ送りて其が
 別本長治山城守が相太とて眩びあふ小乃方台大膳が園のころ平
 田の此石坂(美)と物本(使者)を中園(御)より毛利勢とて兵糧を
 余出せし侍大おせ石中勢乃兵部兜碯上(お)ま案内者(と)送り去指
 後迎を引け其勢と下八百余人九月九日暮方室山より着て城中へ
 お園の狼烟をとげると大膳が此度(後)より押寄せ率(と)園を地て討
 入んとは三本の城より別本山城守が相三(と)余人日討(の)城(を)用て



三本
 毛刺
 の
 両傍
 谷大
 龍を
 龍
 谷



真蹟記二篇卷十二

討て出さしむく大膳が器を自備より文字に近うなる公大膳の
 勇王力の器の兵がれしりも強がはし率と制し汝を必に強勅に
 るのみならず我自ら切て出敵兵を防ぐべし其後中防衛の使
 を堅固にせしと云捨て後二十余人の甲兵を別けし柵際までし
 中園勢が中一面もろに切て入出る者を撰りて前後左右突伏
 恰も猛虎の群羊中に入ぶごとくまてく内より三四十騎をうくと切
 例ではに方へんと退うるも似も中園方大勢なりしに力より
 あの勇兵とて敵の器大膳を討てて名せよと捨てしと云
 突りし大膳を奪うがに方に當りて戦ひが持てる槍も突りて
 刀と捨てて鐵武者人切切て落しんぬる公負せ其身全獲し何れ
 敵を本の子鹿叶ごとく私軍の中よりまてく取捨切刀を首に押して

うと落てぞ死する此戦の獲は器の内蔵後防衛の用意をばし
 大お討しぬともしりもいりしに鉄炮を石が投りし令渡ると防
 きくればある素にお遠ても負死人数をまてし此所後守秀
 吉平山の勢より余騎を率し天村表に馳来り別不山城守相三
 子余人の一甲一侍を降参りしと云んと喚く突て今山城守士率
 中鐵炮を打ちけ圓形他つて出ぬらじ戦より三本の中より勇
 源右左衛門と名余志をに進んで中より者と突伏し勇と云ふ
 戦いしれが秀吉の勢よりとに方に引りて浦坂新内めく敵
 勢はるる並の程と見せんとと大を力打ち討てしれが勇何れ
 於場べき槍を以て突来る両方名器の勇まかりし勝負の事
 に極尾を助かけ来りてをくけて中より今宵の合戦一騎討の戦



魚住
源右衛門
討死

真蹟記二篇卷十一

女用之と大おの御や知なるぞ御免之助やはと申するにたの方より
 魚住は切てうれ魚住もだれの別兵かれば是に思ひるまは二人とおま
 り我より三本方の櫛橋弥又即これをもんく魚住と殺さんとせんよ
 近きり妻をも掛ど堀尾が後より切付たり後助心きうる壯士うれ
 をまう目には乞と吃とんく魚住を捨て櫛橋と後王合志に打合と
 又うろふ堀尾が勇や勝りせん櫛橋を馬より下に切て落し又魚住
 又討てうる此時魚住浦坂が討て力を拂ひ換り内麿を切込目
 又血さらして我いふに申すうろふ堀尾浦坂両人切まらればは勇
 士のはへるうり源を九清門からうるれは後浦坂は討てうる魚住
 源を九清門の女双の思ひくるが只一人秀吉の陣其外浦坂の中へ入
 り人と斬り陣を火とけ焼まんじこれにも秀吉の陣中け

長陣は少しも怠り軍令を厳しくおられ源を九清門志と遂す
 秀吉も被せひの者魚住源を九清門と知りこれに後いふと海
 捕討んと討てうるれは後浦坂は討てうる魚住と後浦坂は討てうる
 合戦は討てうるの押しむる勇士あり此時中國勢は平田の砦を攻
 落し勢い盛る秀吉の後より討てうる三本勢と扱ぐ妻よりうろふ
 秀吉馬より控えたり生れ得る大音と後の敵に目とけ
 又その敵と突破と中國勢ももろと落し穴入るぞと押しむる
 二三度にも度中知とし羽柴が軍兵は下知し依て只又字に別を
 勢と切崩せば秀吉が大音中國の軍中へ突入して受へるふぞ大
 疑ひ智謀を双の秀吉ならしむる計を構へてせん我々の皆落
 し穴入るれと申するにうろふ堀尾は方と構へる附城より中村孫

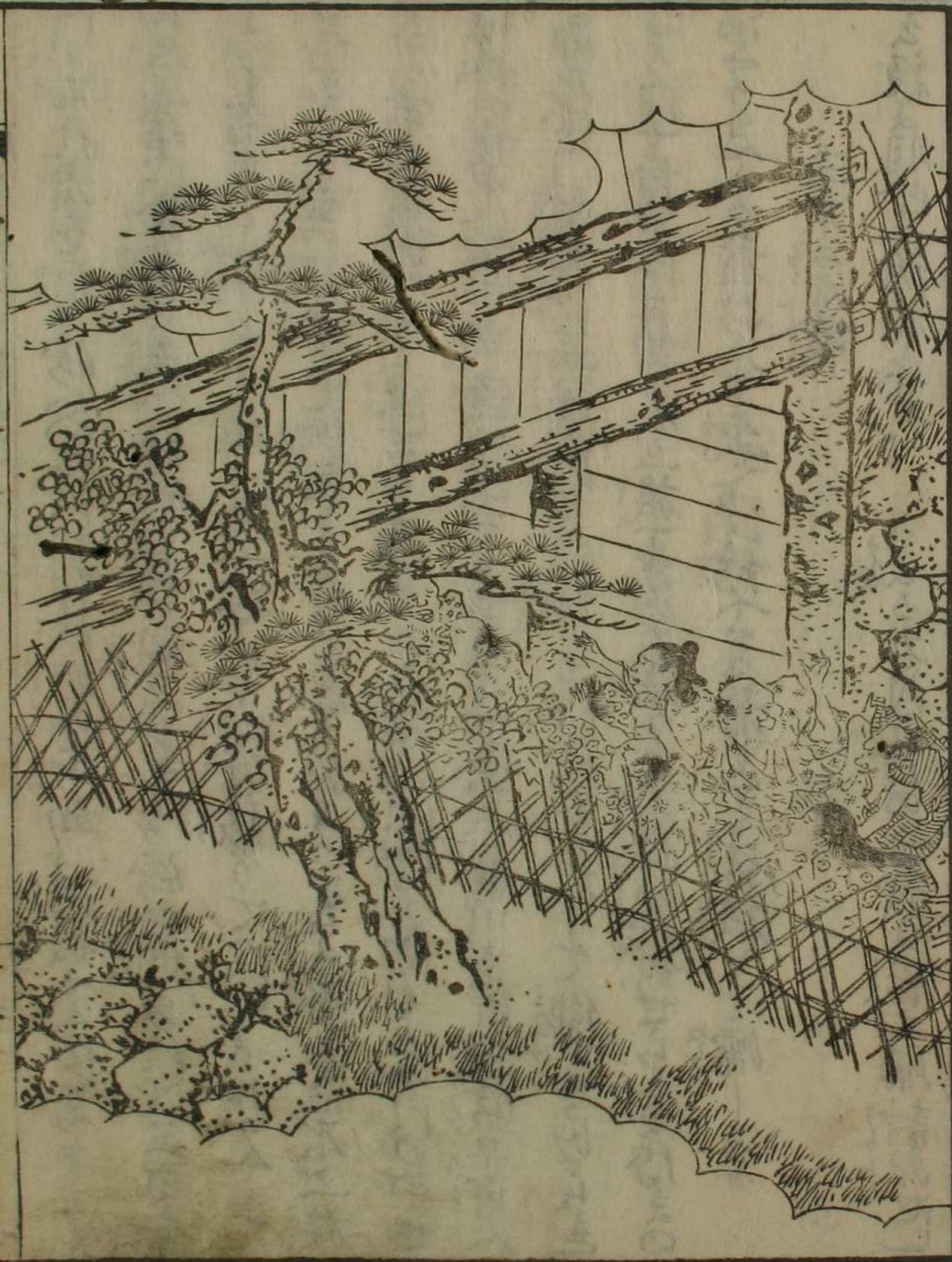
平治宮部若祥坊加茂度内船押給 平思ひくよむ勢より
 一門の嚙て換合より実なれは中國勢固まらざれば作の落
 穴の是をわらば引やくと志はそむれ我を以て濱辺を以て迎出
 踏倒しと押ころし討ち者大す之中村宮部加茂船押が中
 國勢を討捨て三本勢を討てうれいそそ肩より別不六六
 七段の陣を割と思ひくよ迎うる秀吉が兵ども實は追落し
 こに押よせざる名をまぐと三本方より名は喘と勇にこむ兵士踏
 止て討死する人々別不甚と夫は尤近所監光枝小を即高橋平
 左衛門三宅與平治等六百余人討てう大お山城守いんぐよ
 機中にして引給を秀吉が軍勢討てせんと嚴しく追ひ既に危
 くよとる名三本の城より澁川輝定教と勢三百余人討て出必

死なぬて我の内山城守い率して機中へ迎入り 輝定が三百余人を
 討てぬと今いそまそとそまき丘より取捨切て死うけ取
 秀吉が陣を以て味方とまよめ我も是とと勝因を三度揚
 本陣へ引入りけ討中國勢平田の軍場を秀吉の言に追落
 され爰給を交る心地とそ魚垣の海辺よ来て刀入は秀吉が勢カ
 又百余人船に積る兵糧を奪え平山の陣へ運び多る船に
 跡し三百余人の中國勢を奪と我ひたるが羽州本勢平田の
 級軍ゆり来るが刀をくとの兵糧も入るる人此後追入せし候
 一を以て後炮を雨のぶくおくるは中國勢を捕もを放逐し
 船みえのり獲え刀に討てうれいそ三本の機中いよく圍
 籠燃くるひ難く七日之久る

其二



東鑑記二卷卷二



修丹落城



門に下れ者を尾ヶ橋へよせ、利鉄砲を打ち討殺えんとす。其時、尾ヶ橋門途方と云ひ、保丹の城、用後と尾ヶ橋へ納られ、三百余人の者た、惘々として居、はがやく、討殺後、つて、逃るる者、其、つら、あ、い、出、海、て、何、國、も、な、く、あ、り、お、り、ま、す、は、依、て、荒、本、が、族、三十、余、人、系、知、て、保、せ、ら、る、と、て、築、固、嚴、く、あ、り、あ、ら、の、が、せ、保、丹、の、城、中、に、お、り、宗、後、の、武、士、が、妻、子、百、廿、余、人、隴、川、に、逃、れ、監、是、南、に、即、龍、門、尉、降、谷、兵、庫、院、等、に、保、て、尾、ヶ、橋、七、本、松、と、保、ま、り、け、ら、ま、り、同、十、月、十、日、日、荒、本、が、族、系、の、大、將、と、て、不、死、殊、死、せ、ら、る、所、ま、の、あ、ら、り、見、ら、る、者、い、つ、も、文、之、は、保、つ、ら、る、者、と、も、皆、殺、と、ぞ、懼、ら、る、

三本之橋城

去、後、は、羽、柴、藤、原、守、秀、若、者、い、ま、る、九、月、九、日、の、合、戦、は、台、大、胆、討、死、せ、

る、城、中、より、毛利、が、通、り、計、り、を、謀、り、合、兵、を、と、て、城、際、近、く、仕、り、を、付、南、の、八、幡、山、西、の、平、田、山、と、名、を、東、の、駒、場、同、じ、搦、楯、を、う、り、無、く、は、り、兵、糧、と、る、く、と、げ、川、の、表、に、大、網、を、引、渡、し、丸、籠、を、以、と、打、け、と、街、の、い、ま、の、の、處、所、を、構、へ、夜、無、と、終、る、や、く、燒、燬、兵、士、百、余、人、晝、夜、息、を、絶、中、と、見、巡、ら、る、れ、が、三、本、の、城、中、より、い、ま、る、な、ら、う、で、か、う、の、叶、り、は、諸、方、の、糧、米、以、と、止、ら、る、ふ、城、中、に、入、り、弱、り、を、そ、次、に、兵、糧、は、し、く、今、冬、の、末、十、二、月、に、あ、り、て、い、馬、を、殺、し、食、ひ、喰、ひ、陣、に、又、餓、死、せ、れ、者、殺、を、あ、り、は、倒、し、お、た、ま、く、死、て、あ、り、ま、り、け、殺、し、月、が、間、を、う、り、し、く、食、ひ、せ、ざ、ら、ば、ら、を、討、た、か、も、あ、り、刀、と、血、は、情、も、な、く、敵、を、せ、び、い、は、し、て、防、ぎ、ま、し、と、安、と、心、の、あ、り、ら、る、其、年、も、暮、明、る、正、月、と、南、城、お、別、不、小、三、郎、長、治、一、族、宗、後、の、者、と、中、丸、と、張、り、相、後、と、て、ア、ら、り、い、ま、る、本、乙、未、城、中、の、兵、士、忠、勇、を、屋、堅、固、

龍城せりとて時運既傾き落城せんの具文は固き事
城中の軍民士卒悉く命と落しせんも不候の事何れに
就其某を始に族三人切腹し歎いて城中の兵士等が命と助けを
生不吾の死後の本取候事とよく是期と宛せらるる思はし
以て一日は心を以て書翰を以てしめしと守押印右清門
先と後して船形平が陣所へ送る其書曰

唯今中よの意欲去り奉以来款對之事難波其謂
今更不從述其素素係時節別未運命既寤年何齒腹
哉依之長治賀相宗後兩三人未正月十七日申尅
可切腹相定年強士卒難人以下五科而可被刎首之
事誠以不候之類目也以憐愍於被助並者今生之悦

来世之樂何の如之哉け有宜被披露者也

天正八年正月十八日

別所山城守賀相
曰 表之進友好
曰 小三郎長治

船形平反

船形平反書翰を来りての陣所へ持込披露ししは秀吉に心を
感歎し返書に法外候者よと別は士卒に命じて酒十樽綱十束尾
を拵せ城中へ送りしは小三郎長治表之進友好其悦び秀吉の返
書を披きしるる其文曰

書札列来即令披見惟今度合我一而五不尚理矣雖
失勝利更不可謂怯弱雖於運命難適與未十七日申



真景言二作第一

冠長治友の如く相被^レた^レ自害^レ殘士^レ率^レ難人^レ以下^レ被^レ賜^レや
度^レ之^レ由^レ激^レ大^レ將^レ愛^レ士^レ之^レ道^レ若^レ代^レ未^レ國^レ可^レ謂^レ良^レ乃^レ感^レ其^レ心^レ
危^レ者^レ落^レ淚^レ不^レ固^レ右^レ三人^レ於^レ生^レ害^レ者^レ士^レ率^レ殺^レ免^レ之^レ率^レ相^レ遠^レ
あ^レ同^レ後^レの^レ猶^レ後^レの^レ形^レ跡^レ平^レ委^レ曲^レ可^レ申^レ述^レ候^レ謹^レ言^レ

羽柴統元守秀吉

天正八年正月十八日

別所小三郎友

日 秀之進友

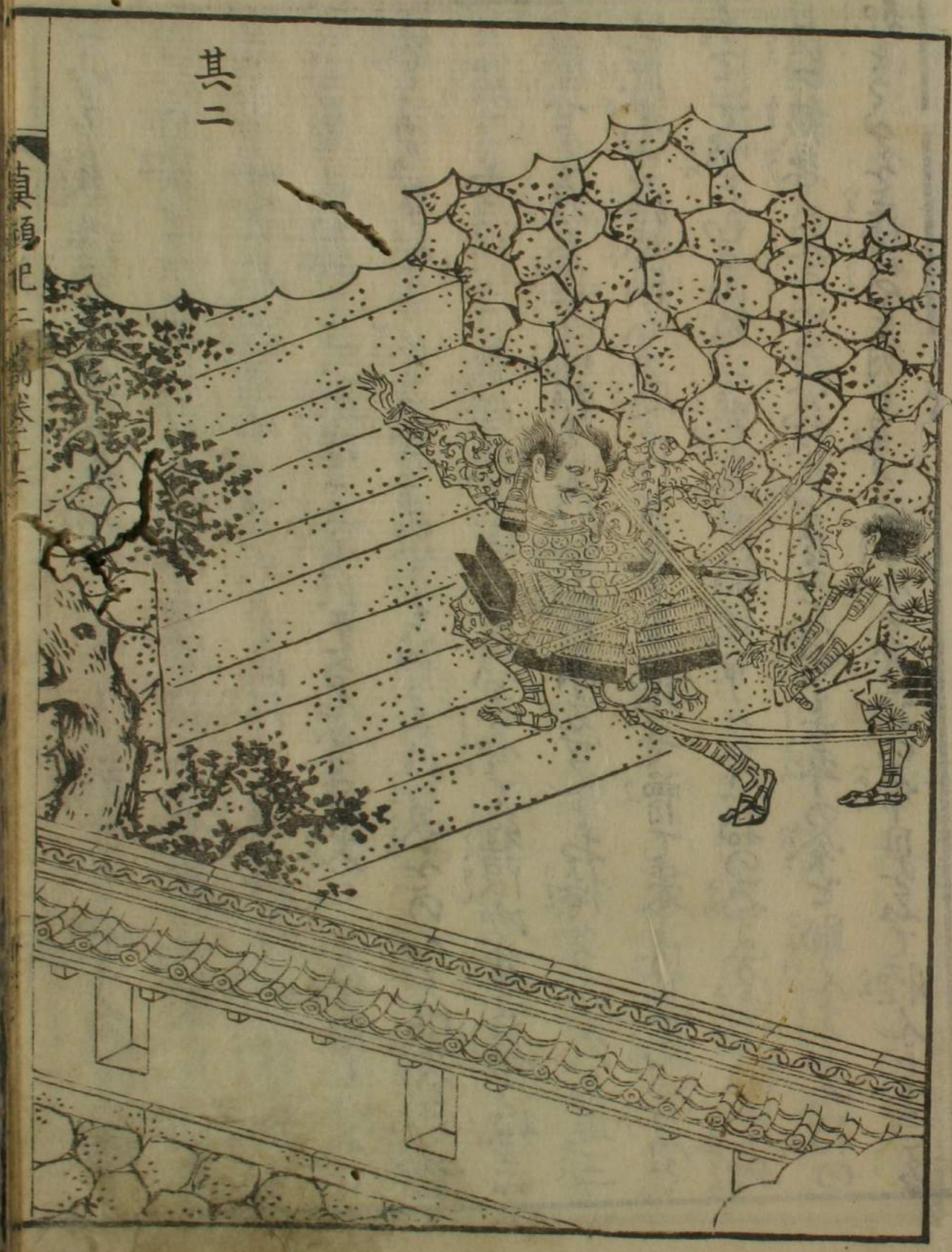
日 山城守友

かくれごとく書^レりたる^レ長治^レ秀^レ之^レ進^レ候^レ比^レ終^レと秀^レ吉^レの^レ礼^レ義^レある^レ瓜^レ
感^レづる^レ既^レ二十七日^レは^レあり^レる^レ別^レ所^レ小^レ三^レ郎^レ長^レ治^レ候^レ中^レの^レ諸^レ率^レを^レ結^レ

らば^レ呼^レび^レ妙^レ匠^レ令^レ根^レ社^レ室^レ武^レ具^レ馬^レ具^レ右^レ刀^レの^レ取^レを^レ分^レち^レと^レ秀^レ吉^レ
より^レ送り^レ紙^レの^レ酒^レ肴^レを^レ以^レて^レ酒^レ宴^レを^レ催^レし^レ兵^レ士^レより^レ向^レひ^レ龍^レ城^レ既^レ二^レ奉^レ月^レ
手^レの^レ忠^レ義^レの^レ志^レと^レ哀^レ世^レ候^レと^レ今日^レに^レあ^レる^レ感^レ歎^レあ^レる^レに^レ死^レ後^レと^レ
の^レ候^レ比^レよ^レこ^レ今^レより^レ出^レ候^レを^レ去^レ何^レ方^レも^レ身^レと^レせ^レ終^レ身^レの^レ納^レり^レを^レ計^レる^レ
ぶ^レと^レ悉^レく^レ眼^レを^レ以^レて^レ兵^レ士^レ後^レ率^レも^レ禮^レの^レ神^レ祇^レ後^レ々^レ
又^レ慰^レ限^レも^レ移^レり^レぬ^レが^レ長^レ治^レ候^レを^レ以^レて^レ契^レの^レ間^レは^レぬ^レり^レ小^レ室^レに^レ長^レ治^レの^レ
妻^レ女^レ及^レび^レ女^レ幼^レ相^レあ^レる^レと^レれ^レ妻^レ子^レ皆^レ生^レ害^レの^レ覚^レ悟^レと^レて^レ傍^レに^レて^レあ^レる^レ
が^レ長^レ治^レの^レ出^レ來^レる^レ瓜^レ分^レ店^レより^レ先^レ初^レを^レ催^レし^レ終^レら^レんと^レ先^レ山^レ城^レ守^レ候^レ
相^レけ^レ妻^レ男^レ子^レ二^レ女^レ子^レ一^レ人^レあり^レる^レ瓜^レ心^レ強^レく^レも^レ刀^レと^レ接^レて^レは^レ殺^レし^レ我^レ方^レの^レ刀^レ
を^レ首^レに^レ押^レあ^レり^レか^レき^レ落^レて^レ死^レり^レる^レ候^レは^レ希^レぬ^レの^レ覚^レ悟^レ之^レけ^レ人^レの^レ畠^レ山^レ
と^レ終^レ身^レの^レ女^レ之^レる^レが^レ心^レ別^レは^レあ^レり^レ候^レは^レ今日^レの^レ生^レ害^レも^レい^レと^レ極^レく^レし^レの^レり^レ

其二

其
二



其
二



ぞいとも長よはらり次は長治の室も三歳はなる男の子に叙し
 日く自宮せらし多し其原之進友初が妻女その年も二は後
 ざりたる小宮教受藤の婢婚女の志も此にあらば任の心地ぬる
 二方かり長進にて洞更止らばさうん女もれ出るとる目もい
 表かりしむしむも止まるるもいもいもいもいもいもいもいも
 り度しくわつらにたる長治悉くは宮内少輔て冠限次第は移りぬる
 山城守と長之進を呼びもに切腹の用を言えとお待たふ小長之進三
 宅肥も治忠西へ速にさきも山城守曾て来は長治いらり
 人をして呼ぶる山城守忽心腹に彼役やろりおのふも方率れ命を抛
 日頃の積悪を記をいれ我もよきとあま士率の命を助んとて大おの
 死をうのをまはらんと時を得てきんよきおの命目をひて怪んとさき

士の死今も落城の隙に及んで我も三人は宮内前と獄門に掛らるも後
 口揃さのちうらや城中の兵を引率二日は切て出思ふ程戦ひ討死せん
 こそ武士の本重なり若る業の叶はじくは城に突とけ死骸と隠せん
 こそせめての心守りいとやろりも長治の氣もな換じ怒りてやろり
 士率とたに切て出討死切死めてん千につも勝てぬのあまこそせも
 兵糧救目長く力とはいらとさき力たたく兵徒らに城中の軍率と
 敵捨く何の蓋うこしあらんや既二時日我は河を委す明取物と如
 彼も我軍の信義を感じ敵うがも酒肴を送りおよひの定定せり
 猶も今にまで物な度飯令討ておろりもやらん並の働きをば敵
 の目も移るは討死心えは況や永き末付は名は流るんけとの私奪
 やみえきれは真末妹の山城も若率押寄て討敵して首とせんと罵らる

を差之進押とら山城を未妻の死にうらみあつた今一應いひてやせ
 芝浦如引としかうが其耐を角も計ひ終へて再俊者をよてませり
 夏下の妻を瓜始れ秋くが妻を又先達で自害し平ぬ今何をう期し
 つしんまげと二本に生害あしと勤められども如相殺て死せしは
 ろつて城申れ兵士は傍りまお小三郎及差之進及諸卒の令と馳ん
 と極心と匠のあふより我く又其志の難あしに惜めぬ令と活て大おの
 御ねきを全くは終る山城もそと拒し首露し令と惜め多勢の死
 をうり見ざる不道の悪人打殺して後の見せしにせよと大勢一度は
 群り妻が如相を捕くす計くよ切て捨りたる長治友好大に恨ひ終
 も計ひもの怨心と安んじ小三郎長治差之進友好肥前守治忠三人
 一曰よ切腹名残後世よとちるあしに世しゆも之時は長治二十二歳

友好二十歳之於此籠城のほつ天正五年のまよりて今八年のまて三年
 の間勇まぬ失ひし卒とに「子卒万若瓜ま」の悉く山城守如相が心
 中より出さるる之終る小終るもて令と惜め物よ背きぬ人のおよ討殺
 さるる悲しむるもたつたや扱も後前守秀吉の物束のぶくも主將
 は害の上り城申の士卒難人先少男女悉く放らるる長治友好首と
 情あつる小姓一人徳冊と持て秀吉の陣に参り執次を以て秀吉に呈
 じ秀吉を以て扱きんる小長治友好等が群世のあつたり
 今いふでやうみもはしやち人の令にさる我身と思へり 長治
 満ももに果身こそは娘とてし扱くと先少おひあせよ 長治妻
 令ども扱まざるうらみの様弓束れ世も名残思ふ身は 友好
 ねのめに後の世も翅もひらる程のちたうあつたり 友好妻



秀吉被別
姫路に
松と
葉

真景言二解卷一

後の世の事も遠くおひきとておぼる初とのを 山城守妻

まぢくうらた身の命何ぞせんおつておひのあせかりも 治忠

かくはこれか秀吉つとよ表と催し三人の首よけ穉世の和方と深安か

（送り別不一家をくこび矢指及平均の首言よけ及ふの不信長か）

大に感へて恨び強ひ申尾源を即をい秀吉が武功を祝し且豊後

給ふ親も秀吉三木の城を今くお忍び供へて揚子のは重を定め志方勇

伯の城を附は美落し民を撫育し仁豊布遊し吾ら國人とるのけり

まじく揚子あ倫相馬使を先他の國くと皆秀吉の徳と賞せし一城一郡

よまらる者振うさふよ来りおさるに集り英名山陰山陽に國九列ぬ

震ひ皆悉く油伏のまに成りしるまに押ひく三木の城下お島國せ

るの都は勝りる白子聖光湯にま若秀吉の武功を際し狂ふを

ゆりりてやゝぬ

まらまるは三木の赤松きりしとてくはぞ山の大本とぬ

別不一家の赤松成りるあよかくいよあり秀吉をばあひ押しく泳

より聖光湯門をらせとゆよせ殺し引出拍狐場りりる

秀吉は築城揚子姫路

家西播磨廣瀬とふふに宇野民部をまとの者ありけ者城と構へ

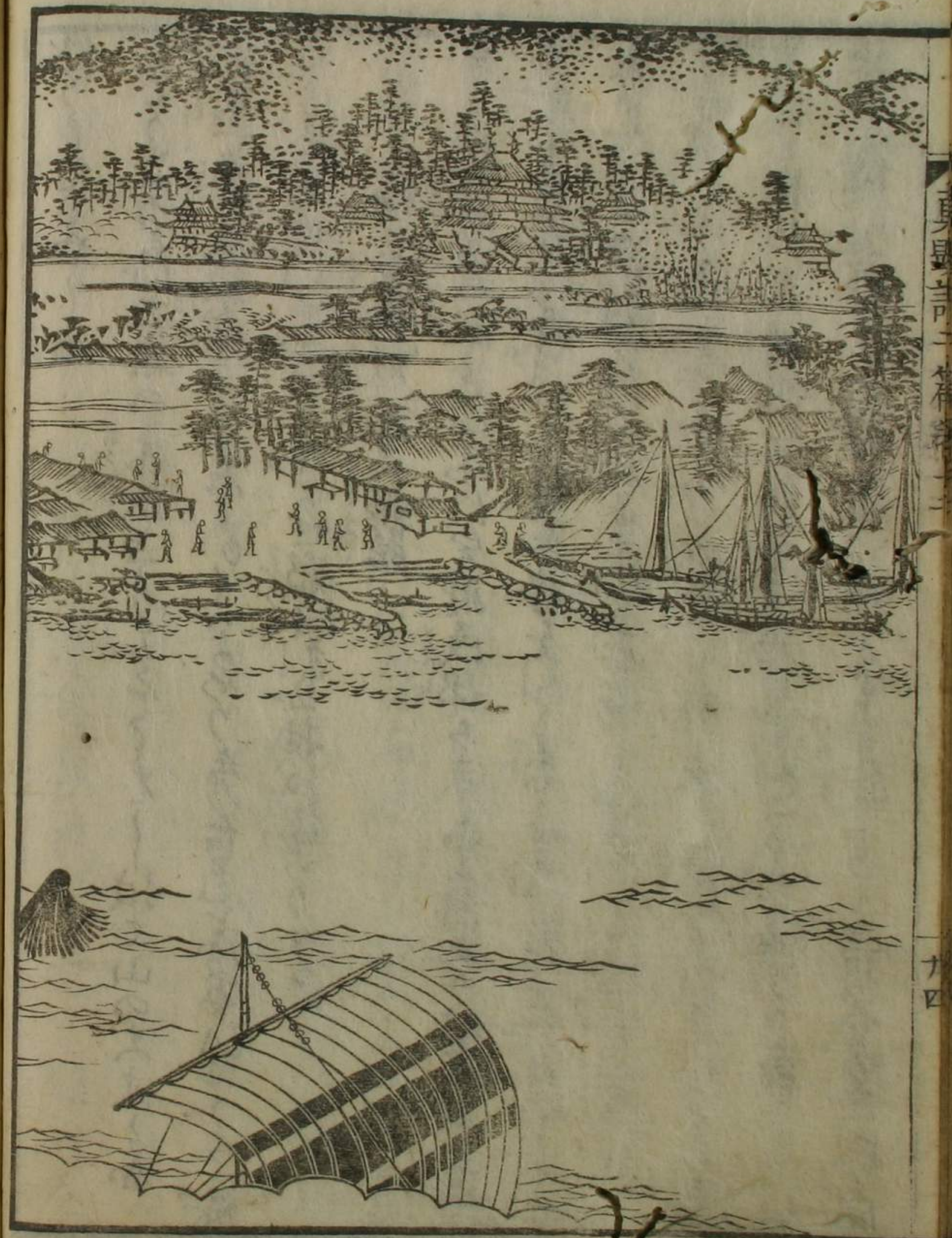
て敷て秀吉に流りて秀吉を軍勢を引く妻よせ只一戦首首百二十余お

えんぐよ切崩せば民部をまじが居城へ入得じて物守守下總し

う居城の山の城跡籠り力と合せし秀吉が防んてはそれよ三木の

名流し別所家籠城し毛利をより助け我いしと妻落しる秀吉をり

終の小城に互勢をそ敵せんゆいありもまを承りく六月日の夜城を用



九月にして落城する秀吉の軍、本下兵を以て勝須賀小六を以て城
 守として、勢を以て百人を以て率、探りて追うる宇野方と云く、
 討つるに、和を思ふ勇士二十余人返り、合討記といひ其際、大野守姓
 も奉り命令と助り、ついでに迎ふたり、本下勝須賀の兩人勢、
 係し、因幡伯耆の陸軍、放火を以て狼烟を揚げ、圍を作り、さき
 奔兵を以て、ついでに秀吉の軍、並に知り、大軍に、美作ら、
 まじり、城に、需りて降と乞ひ、人質を以て、幕下に属し、遠近の
 國々、秀吉の風を、示す、はたし、功名既、成り、んと、此、附羽
 柴流、若き、二本の城、ありて、國政を、執り、れ、ついでに、多助、兵、清、秀、
 右に、若て、や、ついでに、二本の城、の、要害、を、取、り、堅、固、に、し、
 うと、國政を、以、て、全、地、を、以、て、其、某、が、居、住、の、地、に、居、て、一、國、の、中、英、は、

て、亦、も、に、國、九、州、西、國、より、京都、まで、船、の、通、路、心、の、保、り、に、攝、麻、と
 於、て、ん、若、姫、居、り、ついでに、住、り、を、以、て、ついでに、彼、を、以、て、城、と、改、め、り、
 と、勅、り、ついでに、秀、吉、の、軍、を、以、て、城、を、破、脚、し、て、新、に、地、の、理、と、撰、り、要
 害、を、繕、張、し、多、助、を、清、野、村、孫、平、兩、人、を、以、て、是、後、繼、り、と
 急、ぎ、ついでに、日、何、に、以、て、城、廓、令、り、如、乾、し、秀、吉、が、城、に、移、住、し、三、本
 の、城、を、以、て、舍、野、兵、衛、守、小市、秀、吉、長、を、以、て、是、と、守、り、し、不、日、に、中、國、と、切
 陸、人、と、其、用、を、以、て、是、と、り、ついでに、

繪本古圖記二篇卷之三終

書物中に曲意公一世の車を以て國とて清國の國畫に
 申す所其業ありあぬの辭をいふにありて需ふに
 先んて世平行ふところ編纂成る本に寄るを抑中
 の逸民いんを故の代のあると志んや時現
 對し事と果し其のぬかやあん世ののちなり
 かつてあつていふしとをむしとありのやりと
 んおれや寫しぬぬの軍器兵を製續續の城を陣所
 にあつて古画よりなるを伝と寫すに故に改め正
 誤りの多きを多し親の人星のゆか青の事
 たりとあつて但書法におろすはあやまのちか
 ありのぼる中に終るにありては是れと画
 の別なり

時定に改定す秋の月望

龍波海軍の門前は橋玉山書

繪本太閤記

續篇迄々出來

浪華

法橋玉山畫



彫刻氏姓名

一之卷	京都 井上治玄清	七之卷	京都 井上治玄清
二之卷	日 樋口源玄清	八之卷	日 赤沢幸次郎
三之卷	日 井上治玄清	九之卷	大坂 市田治郎玄清
四之卷	大坂 山田和助	十之卷	京都 樋口源玄清
五之卷	京都 井上治玄清	十一之卷	日 井上治玄清
六之卷	日 樋口源玄清	十二之卷	日 樋口源玄清

京都書林

六

菊屋喜兵衛

塩屋忠兵衛

播磨屋新兵衛

海部屋勘兵衛

柏原屋嘉兵衛

勝尾屋六兵衛

大坂書林

寛政戊午年刻成

繪本右圖記三篇

全部十二冊 剛出來

右圖記の書さるや後奈良院の御宇天文五年秀吉が御誕生まらるるより後陽成院崇長三年豊海うきみの期に列とん六十三年が間の事跡と記し公のなんふあつご御幼少を知しし書也且書中多く繪とまへつる文の及ばざる御助けを人をして其時の形勢と妄想しし者あり兵児事の叙は侍るものもあつ御篇十二冊に即天文五年より永禄十二年室所御所造營せらるるとん九十三四年の間に記し既より二篇十二冊に永禄十二年より天文九年秀吉姫路に在城ありしと十三年の間に記し板御所統里三篇又十二冊に天文九年より延宝十年に列て前後二年の間と記し此篇を右圖記全郊中の眼目也御篇三十余年統て十二冊に著とれ其事實の足らざるも二篇十三年御首尾全し三篇よりてい後より兩年の事後美増繁雜しして其丁御篇より多きまゝなるを在て此篇の叙に足らざるを在りし先秀吉丹波征伐より發りて秀吉が中國和睦後其の中より載るる御鳥取の城美甲別攻天目山合戦安土宗論及び秀吉が倭中謀伐先秀吉御二條の城美等所々の合戦御士乃別腹諸家の強弱とあると御史に参考し悉く誤て候とあり

右一四の事の君子篇は御後より御史に参考し悉く誤て候とあり

